

《論文》

## シーボルト著『NIPPON』図版に掲載された 工芸品について

櫻庭 美咲

### はじめに

フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796–1866) は、オランダ東インド会社の医師として訪れた1823年から1829年 (文政6～12) に来日し、1859～1862 (安政6～文久2) 年にはオランダの商事会社顧問として二度目の来日を果たし、自然科学や民族学など幅広い分野で学術的視点から日本を西洋へ紹介したドイツ人である。

最初の来日の帰国後1832年にシーボルトが出版開始した『NIPPON』は、彼が日本でおこなった広範にわたる観察研究の成果をまとめたものである。第一次来日時の彼の来日が、オランダ政府からの委任された職務としての、日本の自然環境、政策と法体制等に関する情報収集、調査研究を目的とするものであったからである<sup>(1)</sup>。同書には、当時日本国内でも重要機密として公表されていなかった伊能忠敬による日本地図や、動植物、日本人の肖像や生活風俗や美術工芸やアイヌや琉球などの民族にいたるまで、日本に関する事物が刻銘に記録され、多数の大型図版とともに公開された。江戸末期の閉ざされた日本について学術的な視点から分析し西洋に広く紹介した学術書として、同書の記述の緻密さと網羅性、そして何よりも情報量の膨大さは比類なきものである。

これら二度にわたる日本滞在中シーボルトが膨大な数量の日本関係資料群を収集したのは周知の通りであるが、特に第一次来日時の収集は前述の職務の範疇でおこなわれ、初めは自然科学関係品、その後1826 (文政9) 年頃から民族学関係品が収集された<sup>(2)</sup>。その一部の収集品は版画に表され『NIPPON』に図版として収録された。自然科学関係品は彼が委託された仕事の一部であったこ

とから帰国後ライデンの国立自然史博物館に保管された。民族学関係品は1832年よりライデンのラーベンプルフ19番地のシーボルトの自宅で公開され、1838年にオランダ政府に購入されたのちも展示は継続された<sup>(3)</sup>。後にこれらは1862年設立のライデン国立民族学博物館 Museum Volkenkunde, Leiden へ移され現在に至る。

本研究は日本工芸にかかわる『NIPPON』図版に掲載されたシーボルト・コレクションの工芸図版の内容を理解するため、神田外語大学附属図書館神田佐野文庫が所蔵する新出資料シーボルト著『NIPPON』の原書を対象に分析を行った。その結果、『NIPPON』図版に掲載された工芸図版には、これまで認識されてきたライデン国立民族学博物館所蔵のシーボルト・コレクションだけでなく、ミュンヘン五大陸博物館所蔵 Museum Fünf Kontinente およびフローニンゲン博物館 Groninger Museum が所蔵するシーボルト・コレクションおよびアムステルダム国立美術館 Rijksmuseum, Amsterdam 所蔵のプロムホフ・コレクションに所収される資料も見受けられることを確認した。本稿では、陶磁器を中心に『NIPPON』の工芸図版をとりあげ、シーボルト・コレクションの工芸品を関連付け俯瞰的に考察することにより判明したコレクションの分岐の様相について論じる。

## 1. 神田外語大学附属図書館神田佐野文庫所蔵シーボルト『NIPPON』書誌情報の概要

神田外語大学附属図書館は、和文では『日本』とも称されるシーボルト著『NIPPON』の原書豪華版の図版版2冊 (PH. FR. VON SIEBOLD, *NIPPON. ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG VON JAPAN UND DESSEN NEBEN- UND SCHUTZLÄNDERN, JEZO MIT DEN SÜDLICHEN KURILEN, KRAFTO, KOORAÏ UND DEN LIUKIU-INSELN : nach japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen* BEARBEITET VON PH. FR. VON SIEBOLD, DIRIGIRENDER SANITÄTS OFFICIER BEI DEM K. HEERE IM NIEDERLÄNDISCHEN INDIEN, RITTER DES NIEDERLÄNDISCHEN LEWEN-ORDENS UND DES K. CIVIL VERDIENST-ORDENS DER BAYERISCHEN KRONE, ERSTER BAND und ZWEITER BAND,

LEYDEN BEI DEM VERFASSEN, 1832–1852) を所蔵する。本書は近年の購入資料（神田外語大学附属図書館登録：2017年1月17日、神田佐野文庫所収）である。本書は352枚もの図版があり全体像を網羅するには論文の制約を超えるため、稿を改め他機関所蔵本の詳細分析の結果をふまえた総合的な報告書等として扱いたい。そのため、今回は神田佐野文庫の『NIPPON』（以下神田佐野文庫本と略）について本稿の主題に直接関わる事項のみに絞り述べる。

### 1-1 『NIPPON』のドイツ語版原書出版事業の多様性

そもそも『NIPPON』は、ドイツ語による初版の出版以降英・仏・蘭・露・日など諸言語で部分的な訳本が出版されたが原典はドイツ語版であり、ドイツ語原典は4度刊行された。すなわち、

1. 1832～1851年にわたり二十分冊として図録とともにオランダのライデンで出版されたもの（以下『NIPPON』初版本と称す）。

*NIPPON. ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG VON JAPAN UND DESSEN NEBEN- UND SCHUTZLÄNDERN, JEZO MIT DEN SÜDLICHEN KURILEN, KRAFTO, KOORAÏ UND DEN LIUKIU-INSELN : nach japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen bearbeitet von Ph. Fr. von Siebold, Leyden, 1832–1851.*

2. 1897年に、シーボルトの子アレクサンダーとハインリッヒ兄弟が父の生誕百年記念会を機として、ドイツのライプツヒで刊行した縮冊本2巻。

*NIPPON. ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG VON JAPAN UND DESSEN NEBEN- UND SCHUTZLÄNDERN, JEZO MIT DEN SÜDLICHEN KURILEN, SACHALIN, KOREA UND DEN LIUKIU-INSELN. von Ph. Fr. von Siebold. Herausgegeben von seinen Söhnen, Würzburg und Leipzig, 1897.*

3. 1930年と1931年にドイツのベルリンの日本学会から、トラウツ博士監修の下に刊行されたもの。

*NIPPON. ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG VON JAPAN. Vollständiger Neudruck der Urausgabe zur Erinnerung an Philipp Franz von Siebold's erstes Wirken in Japan 1823 bis 1830. In zwei Text- und zwei Tafelbänden, dazu ein neuer Ergänzungs- und Indexband von Dr. F. M. Trautz.*

Herausgegeben vom Japan-Institut Berlin. E. Wasmuth. 1930/31.

4. 1975年に東京の日蘭学会の監修のもとに講談社ならびに臨川書店の編集出版したもので、主として初版本を用いているが、その間に三版本も交えた復刻版。*NIPPON. ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG VON JAPAN. Vollständiger Neudruck der Urausgabe zur Erinnerung an Philipp Franz von Siebolds erstes Wirken in Japan 1823 bis 1830.* In zwei Text- und zwei Tafelbänden mit einem Ergänzungsband. Herausgegeben vom Japanisch-Holländischen Institut. Tokyo, Kodansha. 1975<sup>(4)</sup>.

である。

上掲1の出版物は、シーボルト自身がライデンの居宅（現日本博物館シーボルトハウス）で営んでいた所謂シーボルト書店とも称される印刷・出版局<sup>(5)</sup>で印刷されたもので、2種類の形式がある。つまり、まず初め1832年から1851年にわたって13回に分割して配本された（最終的には1858～59年頃とされる）初版本<sup>(6)</sup>。これに加え、初版本にはない「1852」年と明記された内表紙（図1）が付けられ製本されたクオリッチ版<sup>(7)</sup>である。これらは本文と図版から成り、ドイツ語版初版本の発行部数は300部とされる。神田佐野文庫本はこの後者にあたる。

クオリッチ版とは、ロンドンの古書店を営むクオリッチがシーボルト没後1868年に『NIPPON』の在庫を夫人から買い取り、製本したものである。宮崎克典氏によると、在庫であるため、クオリッチ版に綴じられたページは本文・図版ともに初版と基本的には同じであるという。また、図版の用紙には、初版・クオリッチ版に共通して紙の製造元であるファン・ヘルダー社を意味する「VANGELDER」または「VG」という文字の透かし入りの紙が用いられているという<sup>(8)</sup>。ただし、『NIPPON』には全体の目次も通しのページ番号もないため、製本の過程で様々な移動がおり、現存する『NIPPON』初版本は一つとして同じものはないと、国内外で多くの『NIPPON』を調査し成果をまとめた宮崎克典氏は指摘した<sup>(9)</sup>。この点はクオリッチ版も同様であると思われる<sup>(10)</sup>。クオリッチ版本文版には Collation と呼ばれる3頁からなる校合メモが別売りで付属する。そこに「1869」の年号が付されていることから、クオリッチ版の販売は1869年には開始されたことがわかる。

また、『NIPPON』には、初版本、クオリッチ版ともに以下に挙げる3種類



の区別がある。1832年に刊行された『NIPPON』の先行予約案内 (*Prospectus*) には、価格帯ごとに A、B、C の区分が記されている。

- A) 25ギルダー。テキスト部は四折版、上質無簀目紙、石版画は二折版、上質無簀目紙、(石版画の) 衣装、植物などは彩色、綺麗な厚紙 (に収納)。
- B) 18ギルダー。テキスト部は四折版、上質無簀目紙、石版画も同サイズ、ファイル (に収納)、(石版画の) 衣装、植物などは彩色。
- C) 15ギルダー。テキスト部は四折版、上質無簀目紙、石版画も同サイズ、ファイル (に収納)、非彩色<sup>(11)</sup>。

## 1-2 神田佐野文庫所蔵『NIPPON』クオリッチ版 (以下神田佐野文庫本と略)

つぎに、神田佐野文庫本に固有の書誌情報の概略を列記する。

まず、図版は計352枚あり (表紙は除外し口絵のみ算入)、図版は204枚目 (NIPPON II, k. TAB. V) まだが第1巻、205枚目 (NIPPON III, a. TAB. I) 以降352枚目 (NIPPON VII, TAB. XXVII) ままで第2巻に収録した全2巻本とする。

先行予約案内における A の種別の図版の二折版 (フォリオ) の一般的なサイズは、縦22インチ (約54cm)、横17インチ (約42cm)。神田佐野文庫本の図版用紙は、第一巻冒頭口絵の計測で縦57.5cm、横37.2cm と、同図版版全体は概ね二折版の寸法である。衣装をまとう人物や、植物など、39枚の図版が多色に手彩色されており、彩色の扱いも A に該当する。A は「豪華版」と通称されているため以下、これを仮に「豪華本」と称す。

さらに、神田佐野文庫本は各巻に「1852」年と明記された内表紙 (図1) を伴うことから、クオリッチ版であることが明らかである。また、図版に使用された用紙の大半に前述のファン・ヘルダー社を意味する「VANGELDER」または「VG」という文字の透かし (図2) が認められる。

オランダのファン・ヘルダー社が製したこの用紙の製法は、「ぼろ」と呼ばれる布切れや古い網、あるいは藁などに臼を入れて杵ですりつぶし、これを紙漉き用の水槽にひたし、「漉き桁」という網をはめこんだ木枠で漉くというものである。楮、三桮を用いないため和紙ではないが、手漉き紙の一種であ

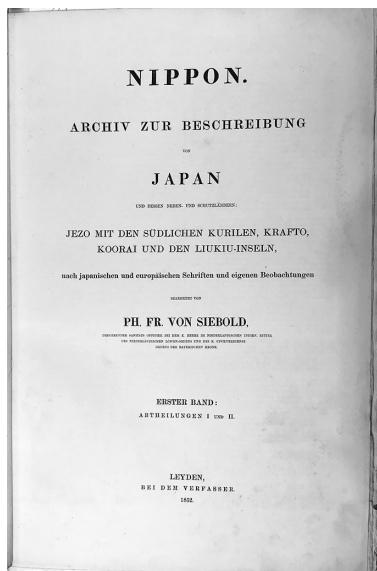


図1 シーボルト『NIPPON』図版 第一巻  
内表紙 神田外語大学附属図書館神田佐野文庫  
所蔵



図2 神田佐野文庫本シーボルト『NIPPON』図版 第一巻ページの透  
かし (図3-1部分)

る<sup>(12)</sup>。図版は石版画という技術で摺られている。石版画とは、平版による版画である。ほかの版画では原版を切るか彫るかして製版するが、その操作をまったくせず製版を行う。『NIPPON』には厚く重い石版石の板を用いる。1798年、ドイツのゼーネフェルダー（Johann Nepomuk Alois Senefelder, 1771-1834）が発明し、脂肪膜が水をはじくという事実に基づいている。図柄を脂肪の入ったチョークで石版の版面に描き、版面を湿し、脂肪性のインクを石版の上にローラーで転がすと、湿った部分にはつかないが、チョークで描い

た部分にはつく。19世紀の美術家たちに取りあげられ普及した方法である<sup>(13)</sup>。日本から持ち帰った原画がオランダの芸術家ヘンリー・ハイデマンス (Henri Ph. Heidemans)、ナーダー (L. Nader)、エルクスレーベン (J. Erxleben) 等により石版画に描き直され、図版が刷られたのであった<sup>(14)</sup>。

前述の通り、初版本と同様にクオリッチ版に収録された図版はその冊ごとに異なっている。352点の図版全体を通覧すると、紙や印刷の種類、石版の描法や版面サイズに多様性があり、版画が貼り付けられたページもあることがわかる。一方当該ページの状態は、筆者が調査した公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会（以下 OAG と略）や国立国会図書館、国立日本文化研究所が所蔵するクオリッチ版とも特徴が異なることを確認した。また、用紙や図版の状態は上記の3機関の例においてもそれぞれ個体毎に異なり、相違箇所や方法もアットランダムであることが確認できた。以下、第1巻の工芸関連に的を絞り図版の特徴を説明する。

第1巻の工芸図版には図版左肩に“NIPPON II”と記されている。先行予約案内 (*Prospectus*) の価格表によると、A (豪華版) では図版の用紙サイズが本文と異なるため必ず本文と図版を別に製本するが、B (通常版と通称される) と C (廉価版と通称される) では本文・図版の用紙サイズは同一である。そのため、初版本やクオリッチ版では、製本する際、廉価版の場合は本文の後に図版を挿入して製本することができるため、本が販売されていた時代の本文と図版の対応関係を確認しやすい。例えば国立国会図書館 (東京) 所蔵の初版本およびクオリッチ版では、I 章本文の後に“NIPPON I”と書かれた図版、II 章本文の後に“NIPPON II”と書かれた図版、後続の章も同様の原則で製本されている。“NIPPON II”と書かれた図版が本文第 II 章の図であることは、本文第 II 章のテキストに“NIPPON II”と書かれた図版に書かれた TAB. No. が挿入されていることから確認できる。しかしながら、No. 142~154に表された陶磁や漆器、竹工芸、麦藁細工など工芸にかかわる内容は本文 II 章と IV 章の両方に触れられ、IV 章の方が工芸品に関する記述がより詳細かつ具体的である。にも関わらず、IV 章の本文編に金工品以外の工芸図版は付属しておらず、工芸図版と本文の関係は混沌としている。この矛盾は、結論から言えば『NIPPON』という出版物が、すでに知られている通り、未完に終わったため、不完全であることに起因するものと思われる。

つぎに図版の用紙について説明する。神田佐野文庫本のクオリッチ版図版では、全体を通じ二折版に版画が直接印刷されたページが大半を占める一方、一部の図版は数種類の異なる質の紙に印刷され、本全体のページの外寸よりひとまわり小さい図版が貼り付けられている。貼り込まれた図版がある点は、これまで調査した OAG 本と神田佐野文庫本の豪華版図版の共通する特徴であるが、貼り込まれた図版の箇所や量、紙の質には相違があり、前者は後者より貼込まれた図版が少ない。

OAG 本の豪華版クオリッチ版は、OAG が在日ドイツ人たちによって赤坂で設立された1873年の設立初年にクオリッチ社から直接購入されたもので、本文編3冊と図版2冊から成る5巻セットある。同書はクオリッチ版発売開始4年後の製本にあたり、二折版の図版の在庫はまだ豊富にあったものと推測される。それでもなお貼込みのあるページがある。一方、神田佐野文庫本は前述の通り神田外語大学附属図書館に2017年1月17日付で登録された新規購入書であるが、中表紙等複数個所に刻印された「WIGAN FREE PUBLIC LIBRARY」という文字と建築物の図案から成る楕円形の蔵書印から旧蔵者を特定することができる。この文字は英国グレーター・マンチェスターのウィガン Wigan という町に1878年に設立された WIGAN PUBLIC LIBRARY（又は WIGAN FREE PUBLIC LIBRARY）という図書館を意味する。また、1912年に刊行された WIGAN FREE PUBLIC LIBRARY の蔵書リストにも本書の記載があることから、本書が同館に所蔵されていた事は明白である。ただし、同リストによれば、1912年時点同館における本書の所在点数は5冊とある<sup>(15)</sup>。神田佐野文庫本が所蔵するのは2冊の図版本であるため、前述の OAG 本5巻セットを参考によれば残りの3冊は本文編であろう。同館は著名な国内の専門家を招聘し急ピッチで貴重書を中心とする購入を進め、開館後8カ月以内に15,300冊もの蔵書を集めている<sup>(16)</sup>。この経緯から、WIGAN PUBLIC LIBRARY は1878年の開館当初にクオリッチ版を購入したと考えられ、製本もその頃行われたと推測できる。よって神田佐野文庫本は OAG 本より恐らく5年程後に製本されたと推定される。

### 1-3 神田佐野文庫本の工芸図版

図版全体のうち神田佐野文庫本第1巻の集計 No. 86、87、142から154（NIP-

PON II 部分)、第2巻の225から235 (NIPPON IV 部分) の、計26頁が工芸品の図版である<sup>(17)</sup>。このうち、144から154にはページの外寸よりひとまわり小さい図版(図3-1)が貼りつけられている。これらの図版の紙はすべて同じ材質とみられファン・ヘルダー社製の用紙の証である透かしが施されたもので、ファン・ヘルダー社製の紙とは異質な洋紙の台紙に貼りこまれている。

図版を貼込んだ理由として、本書を製本する際に、製本時期を重ねるにつれ買い取った在庫の用紙のサイズを二折版で統一することが困難となり、四折版の図版を貼り混ぜる必要性が生じたものと筆者は推測する。そこで、両者の図版用紙を採寸し比較することによりその真偽の確認を試みる(表1)。その際、四折版図版に関する情報は、筆者が作成した国立国会図書館の初版本(1832-1851年刊行、請求記号:特4-26)調査の記録に基づく。

表1のとおり、神田佐野文庫本に貼り込まれた図版と国立国会図書館本初版の図版サイズはほぼ同じである。摺られた図像のモチーフの配置やサイズも同一であるため、貼り込まれた図版は初版本のBタイプかCタイプの版画と推測される。

つぎに、上記2機関所蔵本に九州大学附属図書館医学分館蔵初版本を加え

表1 貼り込みのある NIPPON II 部分工芸図版の図版面用紙サイズの比較

集計 No.	第1巻 図版タイトル カッコ内図版分類 ファベットと Tab 番号	神田佐野文庫本クオリッチ版 ①図版タイプ、②貼込み図版 用紙サイズ (cm)	国立国会図書館本初版本 ①図版タイプ、②図版用 紙サイズ (cm)
144	家具 (f Tab. I)	①二折版台紙に図版貼込み ②縦37.7、横28.2、	①同上、②縦38.4、横29.3
145	家具 (f Tab. II)	①同上、②縦38.1、横28.3	①同上、②縦38.3、横29.2
146	家具 (f Tab. III)	①同上、②縦37.7、横28.0	①同上、②縦38.3、横29.3
147	家具 (f Tab. IV)	①同上、②縦37.0、横27.8	①同上、②縦38.3、横29.5
148	食事道具 (f Tab. V)	①同上、②縦38.2、横27.8	①同上、②縦38.4、横29.3
149	食事道具 (f Tab. VI)	①同上、②縦38.5、横28.2	①同上、②縦38.3、横29.0
150	食事道具 (f Tab. VII)	①同上、②縦38.0、横28.1	①同上、②縦38.2、横29.0
151	酒器 (f Tab. VIII)	①同上、②縦38.1、横28.4	①同上、②縦38.7、横29.6
152	茶器 (f Tab. IX)	①同上、②縦37.0、横28.4	①同上、②縦38.3、横28.2
153	茶器 (f Tab. X)	①同上、②縦36.9、横27.9	①同上、②縦38.3、横29.1
154	果物籠 (f Tab. XI)	①同上、②縦38.7、横28.5	①同上、②縦38.3、横29.2

て、図版ページにみられる透かしについてまとめた表2を参照されたい。九州大学本の初版本（未製本）について、宮崎克則氏が「九大本より揃っている未製本『NIPPON』は国内外で見たことがない。」と述べているように九大本『NIPPON』は欠頁が少なく基準資料として重視されるため、九大本も加え比較を試みる。

神田佐野文庫本では透かしがない版もあるが、九大本でも工芸図版に関わらず全体をみると、透かしがない図版も認められ、透かしの有無は真贋には関わらないことがわかる。九大本に「ELDER」、神田佐野文庫本に「LDER」と、差異があるのは後者の「E」部分が製本の綴じ目に重なるためである。神田佐

表2 NIPPON II 部分工芸図版における透かしの比較および図版下の記載

集計 No.	第1巻 図版タイトル カッコ内図版分類アル ファベットとTab 番号	神田佐野 文庫本 クォリッ チ版	国立国会 図書館本 初版本	九州大学付 属図書館医 学分館本初 版本 <sup>(18)</sup>	図版下の記載 (3文献共通)
86	旅行用具（駕籠） (d Tab. I)	LDER	なし	ELDER	L. Nader del.
87	旅行用具（喫煙具・茶弁 当など）(d Tab. II)	ELDER	ELDER	VANG	L. Nader del.
142	髪飾り・扇・紙入れなど (e Tab. XXIV)	VANG	VANG	ELDER	なし
143	茶道の道具 喫煙具・筆 記具など (e Tab. XXV)	VANG	VANG	VANG	e. collect. de Siebold
144	家具 (f Tab. I)	LDER	ELDER	VANG	なし
145	家具 (f Tab. II)	ELDER	ELDER	VANG	e. collect. d. Siebold
146	家具 (f Tab. III)	VANG	VANG	VANG	なし
147	家具 (f Tab. IV)	なし	なし	ELDER	e. collect. d. Siebold
148	食事道具 (f Tab. V)	VANG	VANG	ELDER	e. collect. d. Siebold
149	食事道具 (f Tab. VI)	ELDER	なし	ELDER	なし
150	食事道具 (f Tab. VII)	LDER	なし	ELDER	e. collect. d. Siebold
151	酒器 (f Tab. VIII)	なし	なし	ELDER	e. collect. d. Siebold
152	茶器 (f Tab. IX)	LDER	なし	ELDER	e. collect. d. Siebold
153	茶器 (f Tab. X)	なし	VANG	ELDER	e. collect. d. Siebold
154	果物籠 (f Tab. XI)	VG	なし	VG	e. collect. d. Siebold L. Nader del



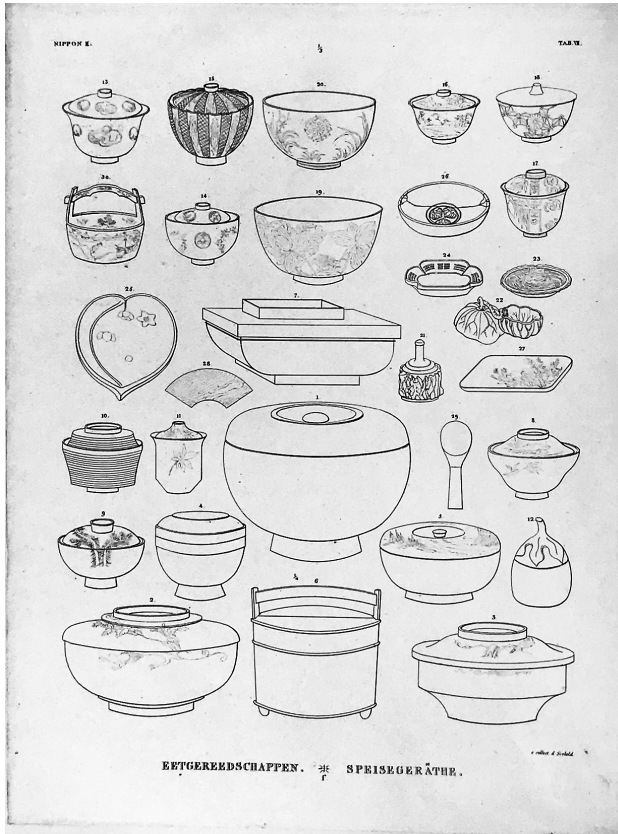


図 3 - 1 神田佐野文庫本『NIPPON』図版 第一巻「食事道具」(f Tab. VII) 図版

野文庫本において透かしが大半に確認できる点は九大本と共通している。

さらに、神田佐野文庫本（図 3 - 1）と国立国会図書館本初版本（図 4）の用紙と印刷の表面構造の顕微鏡観察もおこなった。その一例として No. 150 「食事道具 EETGEREEDSCHAPPEN \* SPEISEGERÄTHE」（図 3 - 1）の各々同じ部分を顕微鏡観察した（図 3 - 2）。その結果、両者に共通して、当時西洋で一般的であった洋紙とは異なる繊維の長い和紙に似た大変珍しいテクスチャーが認められることを確認した。上記 2 点の理由に基づき、神田佐野文

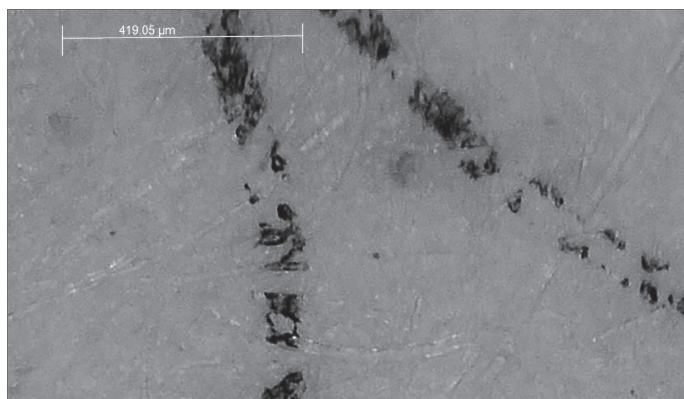


図 3 - 2  
同 顕微鏡観  
察写真

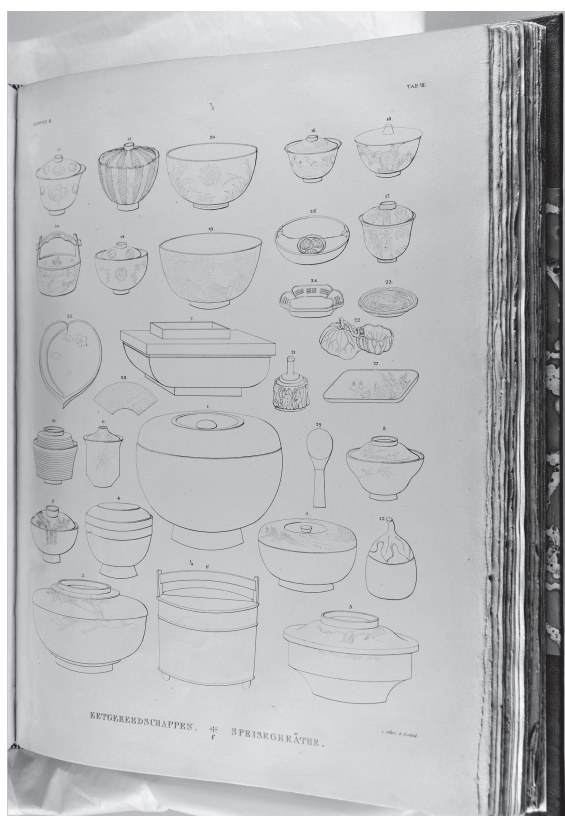


図 4 国立国会図書館本  
初版本『NIPPON』図版  
第一巻「食事道具」(f  
Tab. VII) 図版 写真提  
供：国立国会図書館



庫本、国立国会図書館本の用紙は、九大本と同様にファン・ヘルダー社製と考える。

さらに、図版右下に書かれた「e collect. de Siebold」、「e collect. d. Siebold」はラテン語で、「ex collect. de Siebold」すなわち「シーボルトのコレクションより」を意味し、「L. Nader del」は前述の石版画を製作したオランダの芸術家ナーダーを意味する。

## 2. シーボルト・コレクションの工芸品 ―民族学的コレクションとしての収集の背景―

つぎに、シーボルト・コレクションの工芸品の位置づけをみていこう。

第一次来日時に集められた民族学関係コレクションは主にライデン国立民族学博物館、第二次来日時の民族学関係コレクションはミュンヘン五大陸博物館に保管されている。それ以外の前述の自然科学関係品、書籍や古文書のコレクション等広範多岐にわたる膨大なコレクションはドイツ、オランダの複数の機関と個人に分蔵される。これらすべてを一括した総体がシーボルト・コレクションと呼ばれている。このコレクションはその膨大な数と広汎な領域のみならず、収集者の死後150年以上ものあいだ所蔵機関の管理面で起こった諸般の事情も加わり、コレクションの輪郭は捉え処ないものとなっている。

前述のとおりライデン国立民族学博物館には、1862年の開設当時から第一次来日時に収集されたシーボルト・コレクションが所蔵されていた。これに加えてオランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff, 1779-1853）と出島で蔵の責任者を務めたオランダ商館員ヨハン・オーフェルメール・フィッセル（Johan Frederik van Overmeer Fisscher, 1800-1848）の日本関係民族学資料が、シーボルト亡き後の1883年2月1日に、王立骨董陳列室 Koninklijk Kabinet van Zeldzaamheden からライデン国立民族学博物館へ移管された<sup>(19)</sup>。しかしこのことがシーボルト・コレクションに悲劇をもたらす。ライデンのシーボルト・コレクションにはそれに付随するべき目録 Katalog があるものの、それは個別資料の識別を可能とするような詳細な記述ではなかった<sup>(20)</sup>。にもかかわらず、ブロムホフとフィッセルのコレクションが加えられると、3名のコレクションは個々の収集品を識別するためのコレクション番号

を資料に付けることもなく全て日本関係資料として一括されたため不可分となった。

3名のコレクションには共通点が多い。何故なら、ブロムホフのコレクションは1817年から1823年（文化14-文政6）、フィッセルのコレクションは1820年から1829年に収集された。シーボルトの第一次来日時の収集は1826年から1829年のあいだ、特に1826年（文政9）の江戸参府時を中心に民族学資料が収集された。シーボルトとフィッセルでは、収集時期が重なるだけでなく、彼らが江戸参府のため利用する宿場町も基本的に変わらない。3人が同様の町、場合によっては同じ店で工芸品を購入した蓋然性が高いため、3名のコレクションが近似するのは自然であろう。

シーボルト自身も1830年12月に王立骨董陳列室でフィッセルのコレクションを視察後、1831年9月27日付けの書簡に「民族学的なものの中には、私自身の、そして王立骨董陳列室のコレクションにも入っていないものがあるが、それ以外の重なっているものは、例えばイギリスかフランスに売却してもよい。」と記していることから、彼らの収集品に共通の品があったことがわかる<sup>(21)</sup>。結果的にライデンに保管されるシーボルト、ブロムホフ、フィッセルに由来する日本関係民族学資料は、その大半が収集者の分類がなされぬまま現在に至っている<sup>(22)</sup>。3人の収集者のうち最も詳細なコレクション目録を作成したのはブロムホフである。その目録は近年オランダ語翻刻と和訳の刊行を以って初公開され、ブロムホフのコレクションに限り、特徴が明瞭な一部の資料がライデン民博所蔵品と照合が可能となった<sup>(23)</sup>。

これに対しミュンヘン五大陸博物館のコレクションは2回目の来日時の収集品とされるもので、息子のアレクサンダーの時代に資料に直に書き込まれたコレクション番号とそれに対応するコレクション目録<sup>(24)</sup>からシーボルトの収集品であることが証明できる<sup>(25)</sup>。また、収蔵当初のコレクションの推定数約7千点とされた規模の壮大さからも、基準資料としての価値を有する世界有数規模のコレクションといえるものである<sup>(26)</sup>。

1859年、シーボルトは和蘭商事会社の代表として長崎に、そして1861年夏からは幕府の顧問として江戸に滞在した。帰国に際し彼は、1862年8月に長崎から42箱のコレクションをオランダへ輸送し、アムステルダムで展覧会を開き一般公開した。シーボルトはコレクションを披露し、オランダ政府に対し買い上

げるよう交渉を試みるが成立せず、シーボルトは生まれ故郷ヴェルツブルクへコレクションを移動。今度はバイエルン王国にその購入を持ち掛ける。まもなくコレクションはミュンヘンへ運ばれ、シーボルトはコレクションの売却を二人のバイエルン国王に働きかけた。コレクションは1866年5月より、ミュンヘンのホーフガルテン Hofgarten 北側アーケードで展示されるも、同年10月にシーボルトは世を去った。コレクションは最終的に1874年、ルートヴィッヒ二世（Ludwig II, 1845-1886）の代に国王の同意を得てバイエルン州議会によって買い上げられた。

この一連の経緯によりミュンヘン五大陸博物館のコレクションは第二次来日時に収集したものと広くとらえられてきた<sup>(27)</sup>。シーボルトからバイエルン国王ルートヴィッヒ二世に宛てた1864年11月付け書簡<sup>(28)</sup>において、ミュンヘンのコレクションは1859年から1862年にかけてシーボルトの日本滞在中に収集したもので、その大部分は江戸で入手したものと自ら説明を残した点もこの解釈を補強している。

### 3. 神田佐野文庫本『NIPPON』クオリッチ版工芸図版に表されたシーボルトの収集体

つぎに神田佐野文庫本『NIPPON』クオリッチ版工芸図版に表されたシーボルト・コレクションの工芸品について述べる。ここでは紙面の制約上、集計No. 150～153の4図版に掲載された陶磁器の図を軸とし、必要に応じて漆工や金工などその他の工芸品の図にも触れながら論じる。

つぎに掲載する表3は、図版ごとに掲載された工芸資料について、陶磁器を中心にオランダ・ドイツの博物館所蔵のシーボルト・コレクション、ブロムホフ・コレクションと照合し、一致することが確認できた資料の概要を図版の掲載順、図に併記された資料番号ごとにまとめたものである。一部、冒頭に触れたブロムホフ・コレクションにも若干参照すべき資料があるため適宜加えている。

表 3 NIPPON II 章部分掲載工芸図版の図および本稿掲載の挿図に対応する工芸作品

NIPPON II掲載工芸図版				図に対応する工芸作品 <sup>(29)</sup>								
工芸作品 資料名	図 No	図版 分類	図版内各図資料番号	実測可能な図版上の 代表的な寸法 (単位cm)	計算上の縮尺 (小数)	図 No	所蔵機関	種別	生産地 (カッ コ内作 者)	生産 年代	所蔵元資料番号	寸法 (単位cm)
染付山水文 蓋付碗	5	f Tab. VII	16	総高さ25、高さ20、 口径3.2	1/3	6	フローニンゲン博物館	肥前磁器	肥前地方	18世紀- 1829	GM inv. 1956-167、 旧番号 1 no 488	碗：高さ47、口径9.1、 高台径36；蓋：高さ2.3、 口径8.0、つまみ径2.9
染付光格天皇 菊紋蘭文碗	7	f Tab. VII	20	高さ3.2、口径5.1、 高台径1.8	1/2	8	ライデン国立民族学博物館	有田焼	有田(辻家)	1800頃- 1829	RV-1-569	高さ6.5、口径11.5
					1/2	9	ミュンヘン五大陸博物館	有田焼	有田(辻家)	1800頃- 1829		
白磁蓮葉形水 滴	11	f Tab. VII	22	長径4.0	1/3	12	ライデン国立民族学博物館	平戸焼	肥前地方	18世紀- 1829	GM inv. 1956-168、 旧番号 1 no 568	高さ5.4、口径10.2、 高台径 4.6
					1/2	14	ライデン国立民族学博物館	寶殿焼	兵庫県高砂市	19C 初- 1829		
白釉八卦文小 皿	13	f Tab. VII	24	横3.5	1/2	16	ライデン国立民族学博物館	亀山焼	長崎	1804- 1829	RV-1-526	高さ2cm、縦9.5、横6.5
染付山水手桶 形鉢	15	f Tab. VII	30	横3.5	1/3	19	ライデン国立民族学博物館	陶器	不明	17世紀- 1829	S790g	高さ10、横11.7、高台径9.8
白釉貫入風炉	18	f Tab. IX	1	高さ5.0、口径5.5、 最大径6.25、 高台径3.5	1/3	21	ミュンヘン五大陸博物館	陶器	不明	17世紀- 1829	RV-1-474-B	高さ13.4、口径16.7、 高台径11.4
染付葉唐草文 碗	20	f Tab. IX	6	高さ2.3、口径4.1、 高台径1.8	1/17	23	ライデン国立民族学博物館	肥前磁器	肥前地方	18世紀- 1829	RV-1-3460	高さ3.7、口径7.2
茶碗	22	f Tab. IX	9	高さ3.2、口径4.2、 高台径1.9	1/3	23	ライデン国立民族学博物館	陶器	日本	18世紀- 1829	RV-1-3460	高さ8.5、口径13.0

24	染付水裂文鉢	f Tab. IX	10	高さ27、口径51、 高台径16	1/2	フロニンヘン博物館	肥前 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	GM inv. 1956-166 旧番号 1 N=487	高さ4.5、口径10.8、 高台径3.8
26	染付菊花文碗	f Tab. IX	11	高さ30、口径3.8、 高台径1.5	1/2	ライデン国立民族学博物館	肥前 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	RV-1-571-B	高さ5.5、口径 8
28	天目形茶碗	f Tab. IX	12	高さ2.3、口径4.0、 高台径1.5	1/3	ライデン国立民族学博物館	陶器	日本	18世紀- 1829	RV-1-3457	高さ5.8、口径12.4
30	染付竹文碗台	f Tab. IX	14	最大径6.4、高台径4.0	1/2	ライデン国立民族学博物館	肥前 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	RV-1-485b	高さ2.5、最大径12
32	三島手茶碗	f Tab. IX	15	口径3.1	1/3	ライデン国立民族学博物館	唐津 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	RV-1-3459a	高さ6.2 x 口径10.6
34	染付楼閣山水文蓋付小壺	f Tab. IX	16	総高3.2、蓋径1.0、 最大径3.1	1/3	ライデン国立民族学博物館	肥前 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	RV-1-491	高さ8.6、最大径9.5
36	染付梅花水裂文蓋付小壺	f Tab. IX	17	高さ3.4、蓋径1.2、 最大径3.1、高台径2.0	1/3	ライデン国立民族学博物館	肥前 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	RV-1-489	高さ10.0、最大径9.5
39	白釉茶碗	f Tab. X	17	高さ2.1、口径3.6、 高台径1.1	1/4	ライデン国立民族学博物館	陶器	日本	18世紀- 1823	RV-360-2108b	高さ8.0、口径14.5
41	染付楼閣山水文碗	f Tab. X	18	高さ2.9、口径3.4、 高台径1.4	1/3	ライデン国立民族学博物館	肥前 磁器	肥前地 方	18世紀- 1829	RV-1-485a	高さ6.0、口径9.5
43	梅花散桃形小皿	f Tab. VII	25	縦4.9、横4.6	1/3	ライデン国立民族学博物館	漆器	日本	17世紀- 1829	RV-1-451a	高さ1.2、縦14.4、横13.6
47	提子	f Tab. VIII	5	総高6.7、高さ3.1、 底径4.9	1/3	ミュンヘン五大陸博物館	漆器	日本	17世紀- 1829	S1657	高さ0.7、縦13.8、横13.5
49	長柄鉢子	f Tab. VIII	6	高さ3.3、横15.1、 底径5.1	1/3	ミュンヘン五大陸博物館	金工	日本	1800頃- 1829	MFK-S0963a	総高21.5、高さ11.4、最大幅23.8、口径15.4、底径13.4
52	蓋付竹筴	f Tab. XI	6	総高3.9、径6.3	1/2	ミュンヘン五大陸博物館	金工	日本	1800頃- 1829	MFK-S0963b	高さ12.5、縦27.6、横47.5、 口径16.0、底径13.0
54	鍔絵緑彩馬上人物松文水注	f Tab. IX	4	総高3.8、蓋径1.9、 最大径4.1、底径1.5	1/3	アムステルダム国立博物館	京焼 工	京都	1820頃- 1829	S162k	総高8.0、径13.0
57	竹文煙草盆	f Tab. II	9	総高4.1、高さ2.6、 横3.7	1/6	ライデン国立民族学博物館	寄木 細工	静岡か	18世紀- 1823	AK-NM-6545	総高10.7、幅11.0、底径5.5
										RV-360-2060	総高24.5、横21.5、縦13.4

(計算上の縮尺は下線付きの寸法に基き算出した)

### 3-1 陶磁器の図版

#### 3-1 A No. 150 食事道具 EETGERAETSCHAPPEN \* SPEISEGERÄTHE (f Tab. VII) (図3-1)

【資料番号16 (図5)】

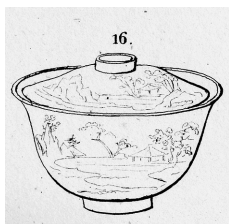


図5 図3-1 図版内  
資料番号16

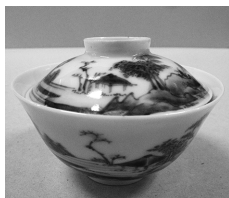


図6 染付山水庵文蓋付碗 フローニンヘン博物館蔵 Groninger Museum, GM inv. 1956-167

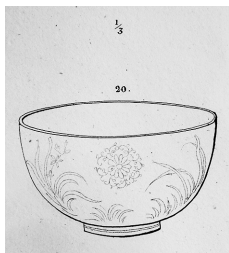


図7 図3-1 図版内  
資料番号20

一致する資料として、はじめにライデン国立民族学博物館<sup>(30)</sup>の染付山水庵文蓋付碗（収蔵番号 RV-1-488、総高8.1cm、口径8.8cm）を挙げる。前述の通りシーボルト、フィッセルとプロムホフのコレクションが一括された日本関係資料群として所蔵される肥前磁器<sup>(31)</sup>である。シーボルトの第一次来日時とはほぼ同時代の製品とみられる。従来、第一次来日時のコレクションはライデンにしかないというのが通説である。ところが同資料の同品は、北オランダのフローニンヘンにある市立博物館、フローニンヘン博物館 Groninger Museum にも所蔵（図6）されているという新たな事実を、同館の学芸員として長年務め、ライデン大学名誉教授でもあるクリスチャー・ヨルフ氏 Prof. Christiaan Jörg のご教示により把握することができた<sup>(32)</sup>。ヨルフ氏によれば、フローニンヘン博物館は当時ライデン国立民族学博物館学芸員であったタイス・フォルカー氏 Tijs Volker から1956年に5点の陶磁器を受け取ったという。本資料はその一部である。フォルカー氏は、5点はいずれもライデン民族学博物館が所蔵するシーボルト・コレクションの一部であると説明したという。図6資料のフローニンヘン博物館の収蔵番号は GM inv. 1956-167であるが、この器の高台内にはライデンのものとみられる「1 no 488」という古い番号の記載がみられ、しかもこの番号はライデンの本資料の同品の収蔵番号収蔵番号「RV-1-488」と一致する。よって、フローニンヘンの本資料はライデンの所蔵品の一部とみて間違いない。

なお、この図版ページの上方中央に「1 / 3」という縮尺が記されている。ライデン、フローニンヘンの所蔵品の双方ともに図の寸法との比が1 / 3であることから縮尺の面からも矛盾がない（表3）。

【資料番号20（図7）】

一致する資料として、ライデン国立民族学博物館（図8）、ミュンヘン五大陸博物館（図9）、フローニンヘン博物館（図10）の染付光格天皇菊紋蘭文碗の所在を把握した。ミュンヘン五大陸博物館には図9の同品がさらにあと1点ある（S743b）。しかしながら、ミュンヘンのコレクションは2章に先述の通り、シーボルトからバイエルン国王ルートヴィッヒ二世に宛てた1864年11月付け書簡において、1859年から1862年の日本滞在中に収集したもので、その大部分は江戸で入手したと自ら述べたものである。一方、フローニンヘンの所蔵品には、前述と同様に「1 no 568」なる旧番号が高台内に書き込まれているが、これはライデンの番号「1-569」の連番に相当する。また、本資料も前述のフォルカー氏が持ち込んだライデンのコレクションの一部である。

この染付光格天皇菊紋蘭文碗は、禁裏御用、すなわち京都の天皇家からの注文により有田の辻家が製した染付磁器の碗である。極めて上質な素地および呉須を用い、光格天皇（1771-1840）の菊の御紋と蘭を繊細な筆致で描いた瀟洒な器である<sup>(33)</sup>。シーボルトは1826年の江戸参府の折京都に立ち寄り1週間以上も京都に滞在し、工芸品を購入するチャンスがあると記し、同地で天皇の宮廷の侍医である小森肥後介（1782-1843）と親交があり、家族同伴での訪問を受けたことにも触れている<sup>(34)</sup>。こうした禁裏御用品は様々な契機に下賜され市中に広まったため、遠く離れた上野忍



図8 染付光格天皇菊紋蘭文碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-569



図9 染付光格天皇菊紋蘭文碗 ミュンヘン五大陸博物館蔵 Museum Fünf Kontinente, München, S743a



図10 染付光格天皇菊紋蘭文碗 フローニンヘン博物館蔵 Groninger Museum, GM inv. 1956-168



岡遺跡群（東京都）からも発見されたほどである。同資料のような禁裏御用品は高位の知人経由、もしくは京都の市中でも入手可能であったかもしれない。上記4点は寸法が若干異なるもののほぼ誤差の範囲であり、組物であると考えられる。ただし、禁裏御用品の性格から、同じデザインの組物が大量生産され、第1次来日時に入手したものと同一の器が、第2次来日時にも入手可能であったとは考えにくい。

さらに、ライデンにはこれらと同じ装飾の皿（RV-1-566）が1点、ミュンヘンでも同じ装飾の皿が2点（S743a, S743b）所蔵されている。なおシーボルトは、1863年にアムステルダムで開催した前述のコレクション展示の目録にこれらの碗と皿を「2247-2248. Theekopjes en schoteltjes van porcelain, met het wapen van den Mikado<sup>(35)</sup>.（帝の紋章付きの磁器の茶碗とその受皿）」と記したが、これらは外国人向けのカップ＆ソーサーではなく、皇族の日々の食事のための碗・皿である。

以上、本資料群の所在の変化を具体的に把握することにより、碗・皿のような組物、すなわち同品が多数ある場合に、恐らくは同品は譲渡しても良いとの判断がなされコレクションが分散したことが浮彫となった。

#### 【資料番号22（図11）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する白磁蓮葉形水滴（図12）である。本資料は1990年に長崎県立美術博物館で行われた展覧会で紹介され、展示図録に平戸焼として掲載されている<sup>(36)</sup>。

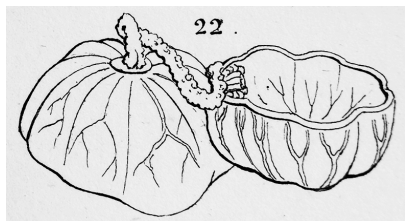


図11 図3-1 図版内 資料番号22



図12 白磁蓮葉形水滴 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-3434



【資料番号24（図13）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する白釉八卦文小皿（図14）である。本資料には同品がほかに、さらに1点（RV-1-526-B）ある。ライデン民族学博物館のDBによれば、本資料には「龍山」という銘があるという。この銘は兵庫県高砂市伊保町に所在する寶殿焼の銘として確認することができる<sup>(37)</sup>。寶殿焼とは、兵庫県高砂市伊保町所在の生石神社で江戸後期に焼かれた陶器で、白陶も焼かれていたが、遺作は極めて少なく大変稀少である。寶殿焼にも白釉陶器の作例があり、八卦という易にかかわる特殊な意匠からも、寶殿焼の可能性は高い。生石神社には「石の宝殿」という史跡があるが、シーボルトは1826年の江戸参府の途中、3月10日に生石神社の「石の宝殿」を訪れている<sup>(38)</sup>。この折に入手した可能性が高いであろう。

【資料番号30（図15）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付山水手桶形鉢（図16）である。本資料も1990年に長崎県立美術博物館で行われた展覧会で紹介され、展示図録に亀山焼（長崎県）として掲載されている<sup>(39)</sup>。

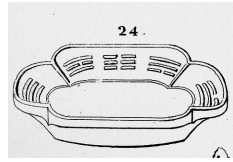


図13 図3-1 図版内  
資料番号24



図14 白釉八卦文小皿  
ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-526

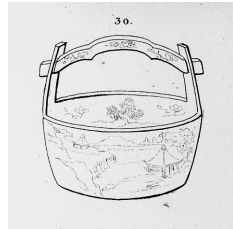


図15 図3-1 図版内  
資料番号30



図16 染付山水手桶形鉢  
ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-576

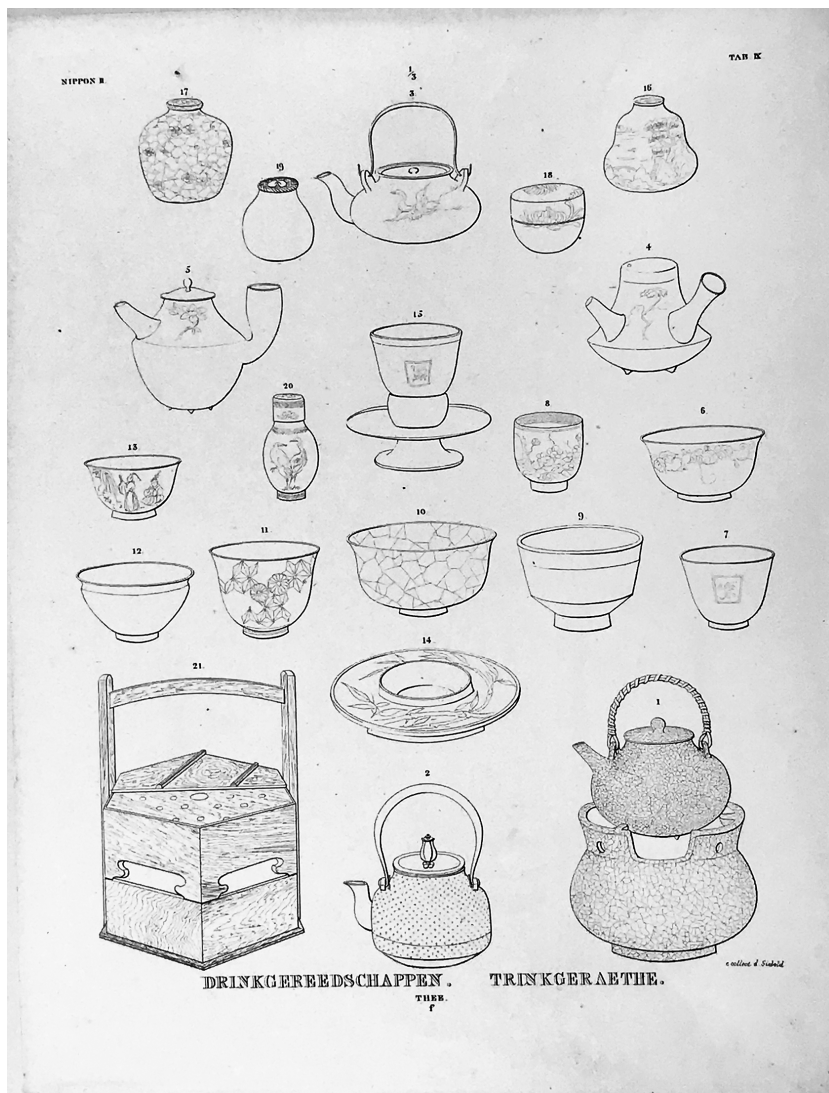


図17 神田佐野文庫本『NIPPON』図版 第一巻「茶器」(f Tab. IX) 図版

### 3-1B No. 152 茶器 TRINKGEREEDSCHAPPEN \* TRINKGERA- ETHE (f Tab. IX) (図17)

#### 【資料番号1 (図18)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館 (RV-1-478) およびミュンヘン五大陸博物館が所蔵する白釉貫入風炉 (図19) である。ミュンヘンの風炉には前面部の縁に欠損があるため、図に描かれた立ち上がる縁の2つの円形の穴の形状を確認できないが、全体のフォルムや釉葉の色調、貫入などの外観が共通している。一方、ライデンの風炉は完品であり、縁中央両側の2つの円形の穴の形状も含め図と同一の形状であることが確認できる。また、この図版ページの上中央に「1/3」という縮尺が記されている。ライデンの風炉は12.8cm、径16.7cmとミュンヘンの器より若干小さいが、双方ともに図の寸法との比が1/3であることから縮尺の面からも矛盾がない (表3)。双方は背面の縁の穴の形状がことなるが、図には背面が描かれていないため、縁背面の形状は図との対応関係の根拠にはならず、双方ともに図に描かれた資料の可能性を指摘できる。この資料の存在からも、シーボルトがバイエルン政府への売却に際し、第一次来日時のコレクションを含めた可能性が想起される。

#### 【資料番号6 (図20)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付葉唐草文碗 (図21) である。シーボルト第一次来日時の同時代に製作されたと考えうる肥前磁器である。本資料は図の縮

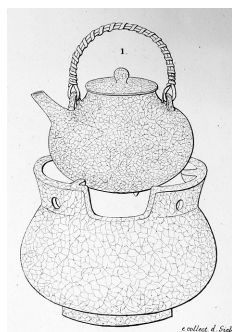


図18 図17図版内 資料番号1

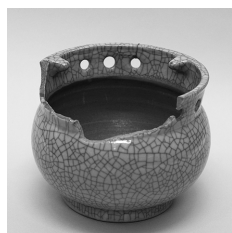


図19 白釉貫入風炉  
ミュンヘン五大陸博物館  
蔵 Museum Fünf Konti-  
nente, München, S790g

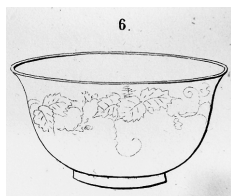


図20 図17図版内 資料番号6



図21 染付葉唐草文碗  
ライデン国立民族学博物  
館蔵 Collection Nation-  
aal Museum van Wereld-  
culturen, RV-1-474-B

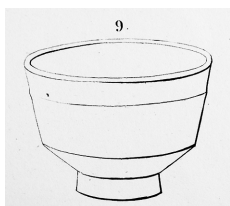


図22 図17図版内 資料番号9



図23 茶碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-3460

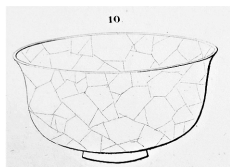


図24 図17図版内 資料番号10



図25 染付氷裂文鉢 フローニンヘン博物館 Groninger Museum, GM inv. 1956-166

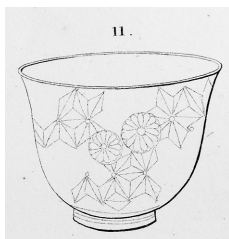


図26 図17図版内 資料番号11



図27 染付菊花文碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-571-B

尺が  $1/1.7$  (表3) と異例だが意匠は同一と見える。

#### 【資料番号9 (図22)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する茶碗 (図23) である。文様がないため特徴に乏しいが、茶碗の形状は図と同一であり、図の寸法との比が  $1/3$  であることから縮尺の面からも矛盾は認められず図の茶碗の同品と判断できる (表3)。

#### 【資料番号10 (図24)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館 (RV-1-487) およびフローニンヘン博物館が所蔵する染付氷裂文鉢 (図25) である。ライデンの鉢は高さ4.4cm、口径11.5cmであり、フローニンヘンの鉢とはほぼ同寸である。このフローニンヘンの鉢にも、前述と同様にライデン国立民族学博物館のフォルカー氏に由来する「1 N=487」という旧番号が高台内に記されている。本資料は図の縮尺が  $1/2$  であるものの、意匠は同一と見える。縮尺を図版の標準から変更したのかより大型の同一意匠の資料がほかにかつて存在したのか、不詳である。

【資料番号11（図26）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付菊花文碗（図27）である。シーボルト第一次来日時の同時代に製作されたと考えうる肥前磁器である。本資料にも菊花文が表され、禁裏御用品の一種とみられる。図8～10の染付光格天皇菊紋蘭文碗より小ぶりで口がよりすぼまっている。本資料にも同じ意匠を伴う皿がある（RV-1-571）。

【資料番号12（図28）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する天目形茶碗（図29）である。口縁を捻り返した龜口から土見せとなる小さな高台まで、漏斗状にすぼまる茶碗の形状は図と同一である。図は、一般的な天目の形状であるため、同一品か否か判断は難しいものの、ライデンのコレクションには他に同じ器形の茶碗がないため同一品の可能性が高い。また、図の寸法との比が1／3（表3）であることから縮尺の面からも図版の縮尺表示との矛盾は認められず、図の茶碗の同品である可能性が高い。

【資料番号14（図30）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付竹文碗台（図31）である。シーボルト第一次来日時の同時代に製作されたと考えうる肥前磁器である。

【資料番号15（図32）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する三島手茶碗（図33）である。両者の胴部は同一のカーブを描き、外

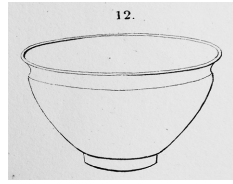


図28 図17図版内 資料番号12



図29 天目形茶碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-3457

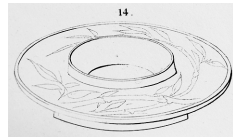


図30 図17図版内 資料番号14



図31 染付竹文碗台 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-485b

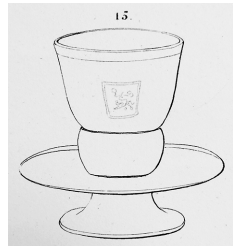


図32 図17図版内 資料番号15





図33 三島手茶碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-3459a

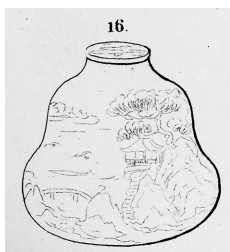


図34 図17図版内 資料番号16



図35 染付楼閣山水文蓋付小壺 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-491

面の縁下に圈線をともない、胴正面に設けられた正方形の二重窓内に梅の小枝を配している。本資料も図の寸法との比は1／3（表3）、表示縮尺との矛盾もない。

【資料番号16（図34）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付楼閣山水文蓋付小壺（図35）である。シーボルト第一次来日時と同時代に製作されたと考えうる肥前磁器である。

【資料番号17（図36）】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付梅花氷裂文蓋付小壺（図37）である。シーボルト第一次来日時と同時代に製作されたと考えうる肥前磁器である<sup>(40)</sup>。

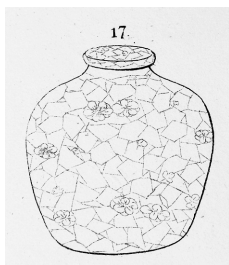


図36 図17図版内 資料番号17

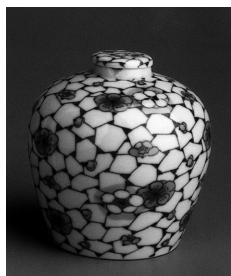


図37 染付梅花氷裂文蓋付小壺 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-489

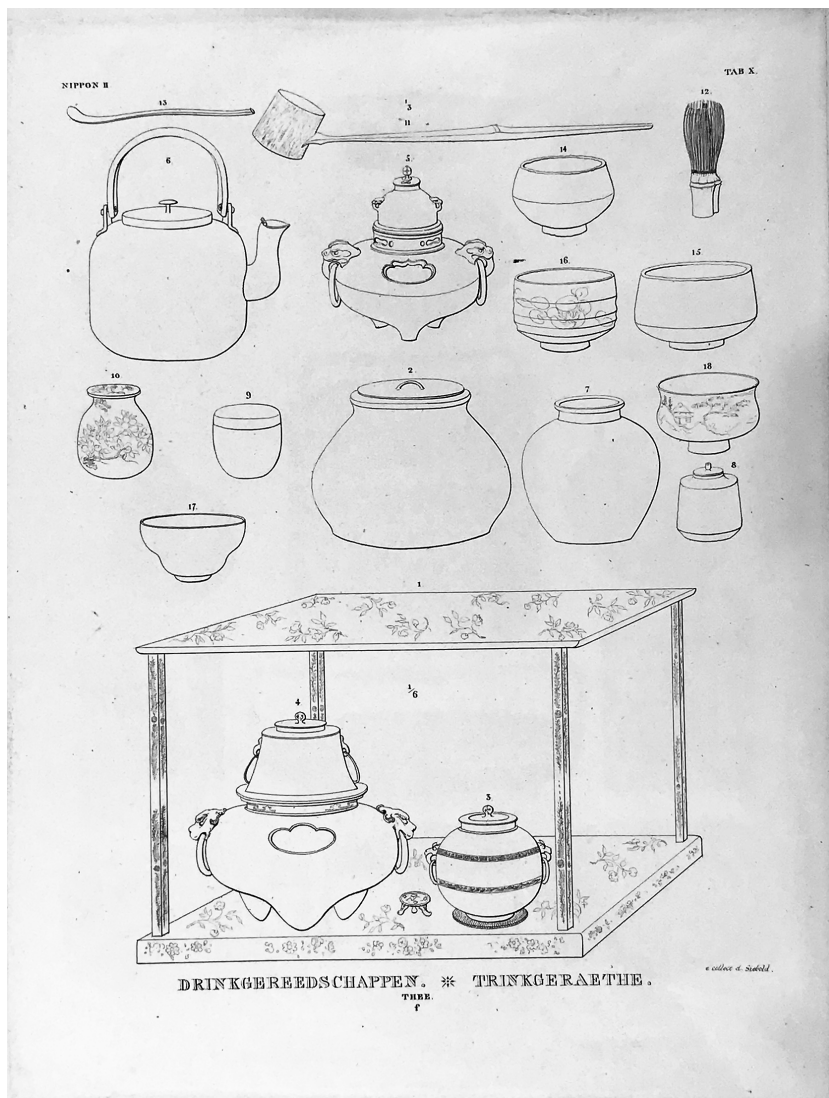


図38 神田佐野文庫本『NIPPON』図版 第一巻「茶器」(f Tab. X) 図版

3-1C No. 153 茶器 TRINKGEREEDSCHAPPEN \* TRINKGERA-  
ETHE (f Tab. X) (図38)

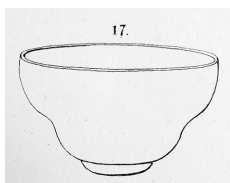


図39 図38図版内 資料番号17

【資料番号17 (図39)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する白釉茶碗 (図40) である。両者の胴部は同一のカーブを描いており、同館が所蔵する同じ白釉をかけた3点の類似の茶碗のうち、フォルムの形状が最も近い。本図版にもページの上方中央に記された「1 / 3」という縮尺に対し、本資料は図の寸法との比が1 / 4 (表3) と疑問が残るもの、形状の一致は顕著である。

【資料番号18 (図41)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する染付楼閣山水文碗 (図42) である。まるで太湖石のような形状の小山の麓に楼閣、松のような松とおぼしき樹木、たなびく雲を表し、口縁に口鏤をほどこしている。ただし、これら絵付の光景は左右反転している。版画製作の過程で下絵を逆に置いたためである可能性がある。本資料は、図の寸法との比が1 / 3 (表3) であり、表示縮尺との矛盾がない。



図40 白釉茶碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-360-2108b

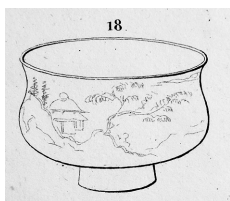


図41 図38図版内 資料番号18



図42 染付楼閣山水文碗 ライデン国立民族学博物館蔵 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-1-485a



3-2 ミュンヘン五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクション：漆器・金工・竹細工

3-2A No. 150 食事道具 EETGERAETSCHAPPEN \* SPEISEGERÄTHE  
(f Tab. VII) (図3-1)

【資料番号25 (図43)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館 (図44) およびミュンヘン五大陸博物館 (図45) が所蔵する蒔絵梅花散桃形小皿である。ライデン国立民族学博物館はほかにも同品 (RV-1-451b) を所蔵している。つまり本資料は合計3点現存することになる。本資料は、江戸期を通じて生産された比較的一般的な沃懸地、薄肉高蒔絵、螺鈿、金貝という手法で装飾された上手の漆器である。ライデンの2点は同寸であり、ミュンヘンの寸法 (表3) と若干の差異があるものの誤差の範囲であるため、これらは同じフォルムの器からなる組物と解される。本図版のページの上方中央に記された「1/3」という縮尺に対し、本資料は図の寸法との比が1/3 (表3) であり、表示縮尺との矛盾もない。また、一般的には注文を受けて製作された漆器の場合、同品をシーボルトが第一次来日時と第二次来日時に二回入手したことは考えにくく、やはり、第一次来日時に入手した本資料が組物のため複数手に入り、そのため、そのうち一点をバイエル政府に売却する際コレクションに加えたものと考えられる。

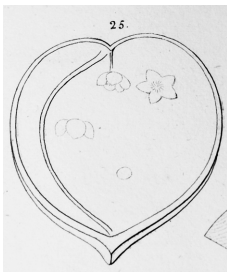


図43 図3-1 図版内  
資料番号25



図44 蒔絵梅花散桃形  
小皿 ライデン国立民  
族学博物館蔵 Collection  
Nationaal Museum van  
Wereldculturen, RV-1-  
451a

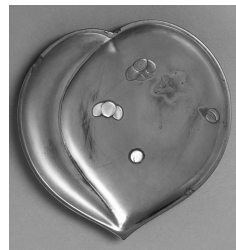


図45 蒔絵梅花散桃形  
小皿 ミュンヘン五大  
陸博物館蔵 Museum  
Fünf Kontinente,  
München, S1657

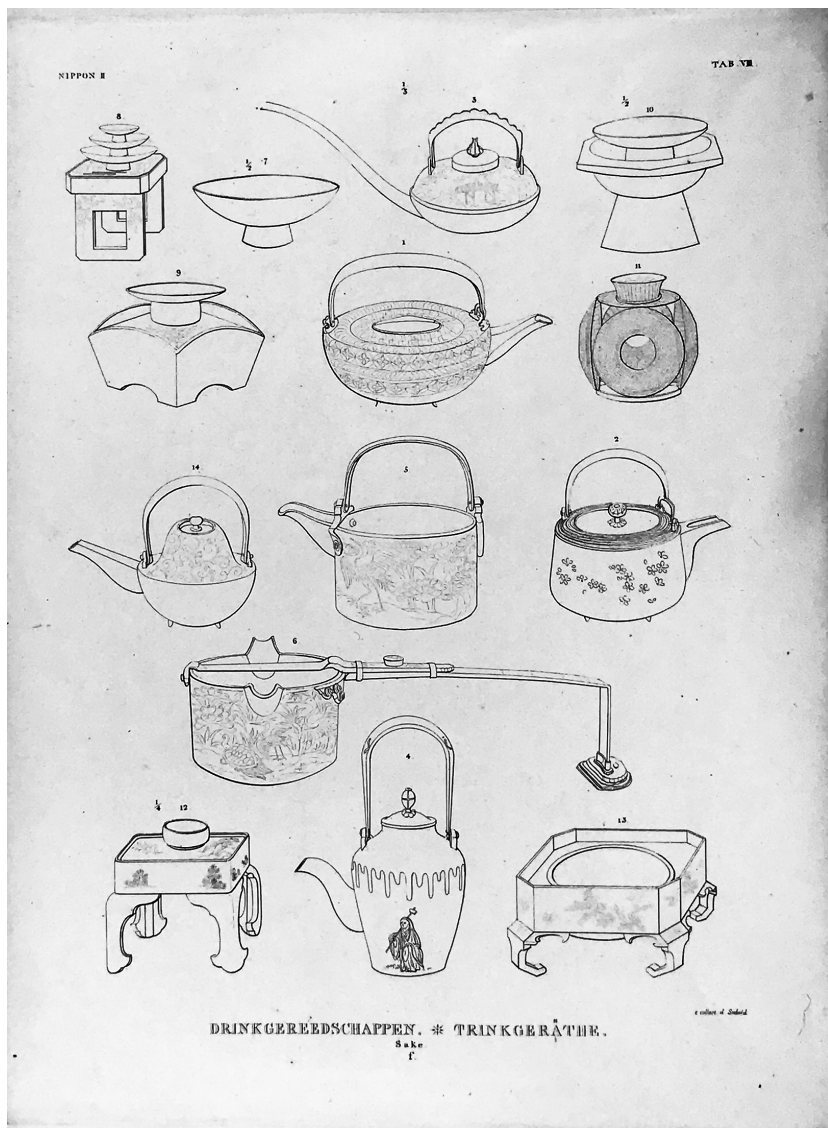


図46 神田佐野文庫本『NIPPON』図版 第一巻「酒器」(f Tab. VIII) 図版

# 3-2B No. 151 酒器 TRINKGEREEDSCHAPPEN \* TRINKGERA- ETHE (f Tab. VIII) (図46)

## 【資料番号5 (図47)】

一致する資料として確認できるのは、ミュンヘン五大陸博物館が所蔵する提子(図48)である。銅に鍍金をほどこした円筒形の酒器。側面に松竹鶴亀を蹴彫、毛彫で表し、地には魚々子を蒔いている。底裏は大きく牡丹花を蹴彫している。注口側の金具には牡丹文、唐草文を蹴彫。弦の上面に八双形を彫り、その内に松竹文を蹴彫し、地は魚々子をほどこす。注口側の弦付金具は琴柱形の上に花先形、後側の弦付金具は下膨れ瓶形の上に花先形を付けた形状をしており、瓶形部に鶴丸文を蹴彫、魚々子を蒔く<sup>(41)</sup>。本資料の同品はライデンのコレクションにはみられない。

## 【資料番号6 (図49)】

一致する資料として確認できるのは、ミュンヘン五大陸博物館が所蔵する長柄銚子(図50)である。銅に鍍金をほどこした円筒形の酒器。側面に松竹鶴亀を蹴彫し地に魚々子を蒔く。底裏は大きく牡丹花蹴彫。注口下は点線彫による唐草文。柄の上の文様は八双形を線刻して松竹文を毛彫、蹴彫している。長柄は全体の中心部が二重となり、重ね合わせは両柄の端に巻金具(2個) その間に笠鉾を打ってカラクリ留めしている。長柄の先端は柄香炉のように折り曲げて地付きに五弁花形の座金を作り(波涛文蹴彫)そこに方形の受

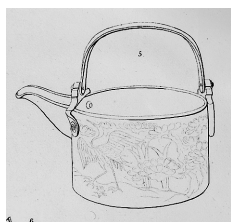


図47 図46図版内 資料番号5



図48 提子 ミュンヘン五大陸博物館蔵 Museum Fünf Kontinente, München, MFK-S0963a

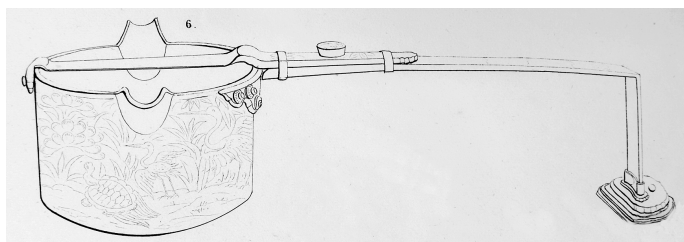


図49 図46図版内 資料番号6



図50 長柄銚子 ミュンヘン五大陸博物館蔵 Museum Fünf Kontinente, München, MFK-S0963b

け金具を立ち上げて、柄先を挿しこんでいる<sup>(42)</sup>。

このように、図48、50の酒器はともに実に濃密に装飾された大変上質な器である。本資料も前述の提子と同様にライデンのコレクションには同品が確認できない。図版にはこれらのフォルムが克明に描写されており、文様や形状などあらゆる点で一致している。また、本図版のページの上中央に記された「1／3」という縮尺に対し、これら2点の酒器は共に図の寸法との比が1／3と（表3）、表示縮尺との矛盾もないため、図版のモデルに相違ないであろう。

### 3－2C No. 154 果物籠 FRUITMANDJES \* FRUCHTKORBCHEN (f Tab. XI) (図51)



図52 図51図版内 資料番号 6

#### 【資料番号 6 (図52)】

一致する資料として確認できるのは、ミュンヘン五大陸博物館が所蔵する蓋付竹籠（図53）である。図52の竹籠の蓋のつまみの下部に縁取りがあり、それに連続して薄細い竹辺を3重の菊花文のように巡らせ、蓋の縁、器の縁は垂直に重ねられている。また器の頸部



図51 神田佐野文庫本『NIPPON』図版 第一巻「果物籠」(f Tab. XI) 図版





図53 蓋付竹籠 ミュンヘン五大陸博物館蔵  
Museum Fünf Kontinente, München, S162k

竹籠は軽く、入れ子にして運搬することもできるため大量に輸送できるものである。シーボルトは第二次来日時にこの種の竹籠を大量に入手したために、オランダ政府への売却後も期待外れに竹籠が手元に残り、それをバイエル政府に販売するコレクションに含めたのではないだろうか。

### 3-3 アムステルダム国立博物館・ライデン民族学博物館所蔵ブロムホフ・コレクション

#### 3-3A No. 152 茶器 TRINKGEREEDSCHAPPEN \* TRINKGERAETHE (f Tab. IX) (図17)

【資料番号4 (図54)】

一致する資料として確認できるのは、アムステルダム国立博物館が所蔵する鍔絵緑彩馬上人物松文水注 (図55) という1820~30年頃製作されたと考えられるタイプの京焼で、ヤン・コック・ブロムホフによる収集品である<sup>(43)</sup>。本稿2章に前述のとおり、ブロムホフのコレクションのうち民族学に関わる日本関係資料は1883年2月1日に王立骨董陳列室からライデン国立民族学博物館へ移管された。ただしこの時、芸術的な価値をもつとみなされた資料はアムステルダム (現在のアムステルダム国立美術館) に移管された。図55の水注は王立骨董陳列室からアムステルダムへ移されたもので、現在のアムステルダム国立博物館の収蔵番号 (AK-NM-6545) とは別に付与された「KKvZ2868」という王立骨董陳列室の収蔵番号があることから、ブロムホフの収集品として判断することができる<sup>(44)</sup>。



図54 図17図版内 資料番号4

図55は、筆者は2011年5月にアムステルダム国立博物館で本資料を実見した。残念ながら図（図54）のカットと同じ面から撮影した写真を掲載することができないが、つまみのない独特な蓋の形状、腰にかけてカーブを描くように拡張する胴、両端が中央より広く斜めに付けられた棒状の把手、細い注口、中央の松の絵付け、底面に三つの突起をもつ三足の珍しい形状において、両者は共通している。ただし松の枝の向きが左右反転している。松の向きは版画製作の過程で反転したか、本図と同じ急須がライデンに別に存在するのかという疑問は残る。ただし、本図版のページの上方中央に記された「1／3」という縮尺に対し、これら2点の酒器は共に図の寸法との比が1／3であり（表3）表示縮尺において矛盾はない。



図55 銑絵緑彩馬上人物松文水注 アムステルダム国立博物館蔵 Rijksmuseum, Amsterdam, AK-NM-6545

### 3-3B No. 145 家具 HUISRAAD \* HAUSRATH (f Tab. II) (図56) 【資料番号9 (図57)】

一致する資料として確認できるのは、ライデン国立民族学博物館が所蔵する竹文煙草盆（図58）である。本煙草盆はこれまで収集者がシーボルト、ブロムホフ、フィッセルのいずれか未確定とされてきた日本関係資料群の一部であるが、資料にコック・ブロムホフのイニシャルである「CB」という文字記載を伴う。また、それに加え、近年初公開されたブロムホフの収集目録の記載からもブロムホフの収集体と判断しうる数少ない例である<sup>(45)</sup>。

本資料は、上部に七宝繫ぎの透かしを伴う金属製の火入れ、灰落とし、角型の把手、全面に煙管、煙管受を伴う寄木細工である。全面上部の窓に囲まれた七宝繫ぎ文様、引き出しに描かれた竹文様は漆で描かれている。同じ絵付けが図版にも認められ、引き出し

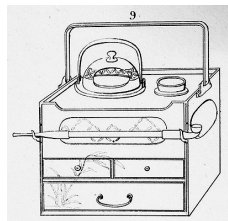


図57 図56図版内 資料番号9



図58 竹文煙草盆 ライデン国立民族学博物館 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen, RV-360-2060

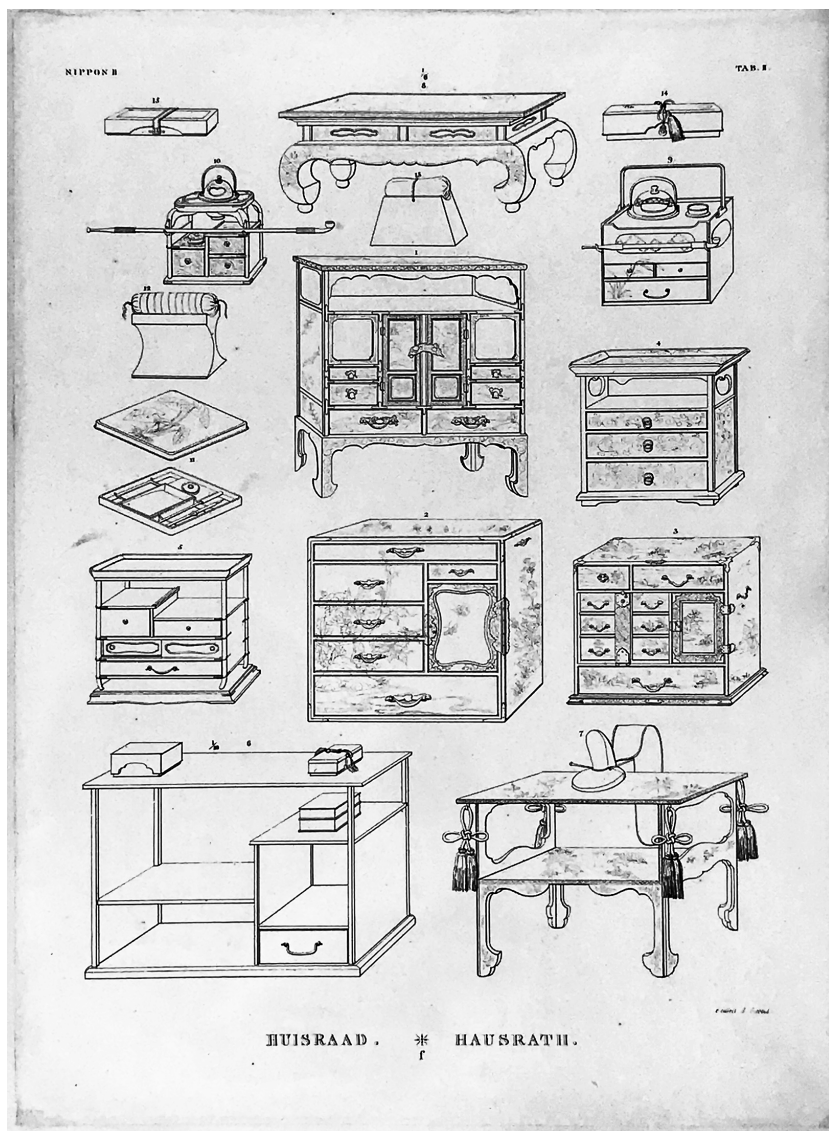


图56 神田佐野文库本『NIPPON』图版 第一卷「家具」(f Tab. II) 图版



の把手の形状も同一とみられる。一方、上部の角型の把手の付け根の形状が異なり、全面を覆う寄木の格子状のテクスチャー、右側面の文様が描写されていないという差異もある。

漆塗をともなう寄木細工は静岡の特産品として知られるもので、これに対し箱根の寄木細工に漆塗りは施されない<sup>(46)</sup>。当時府中と呼ばれていた宿場町（現在の静岡市葵区）はブロムホフやシーボルトの江戸参府における宿泊地でもあり、『NIPPON』にも府中の木工品について詳しく触れられている<sup>(47)</sup>。そのため、本資料は府中宿で購入されたものと推測される。ところで本図では、火入れと灰落としが実物に対し左右反転している。この煙草盆は、分解し、組み立て直すことで同じ形状になる構造ではない。又、ライデン国立民族学博物館には、本資料と別に本図と同一形状の煙草盆も存在しない<sup>(48)</sup>。そのためやはりこの図は一部分が反転したものと認めざるを得ない。

## 結語

シーボルト著『NIPPON』クオリッチ版図版第1巻掲載の工芸図版の図の描写と、オランダ・ドイツに所在するシーボルト・コレクション工芸の実物資料を厳密に比較することにより、シーボルト第二次来日時の収集品と考えられてきたミュンヘン五大陸博物館所蔵の工芸品コレクションに、『NIPPON』図版の掲載資料が含まれることが判明した。また、ブロムホフ・コレクションの水注（アムステルダム国立博物館所蔵）と煙草盆（ライデン国立民族学博物館所蔵）の事例は、シーボルトがブロムホフからコレクションを購入した可能性、もしくは『NIPPON』図版の一部の図像にはブロムホフの収集品が参照された可能性を示す具体的な事例として注目される。

前述の通り、ライデンの日本関係民族学資料の収集者を完全に確定することはできない。しかし、『NIPPON』の当該工芸図版には「e. collect. d. Siebold（シーボルトの収集品の例）」との記載があるため、図に表された工芸品は基本的にはシーボルトの所有に帰するものと解される。

シーボルトは第一次来日時の収集品の資料の一部を第二次来日時のコレクションに加えてバイエルン政府に売却した可能性が高い。こうしたケースはとりわけライデンにも重複してみられるミュンヘンの資料（図9、19、45）のみ

ならず、ライデンにはないミュンヘンの資料（図48、50、53）にも該当する。本稿第2章に前述のとおり、シーボルトは1830年12月に王立骨董陳列室でフィッセルのコレクションを見た後作成した1831年9月27日付けの書簡に「民族学的なものの中には、私自身の、そして王立骨董陳列室のコレクションにも入っていないものがあるが、それ以外の重なっているものは、例えばイギリスかフランスに売却してもよい。」と記したという。同様の発想がコレクションをバイエルン政府に売却する際にも作用した可能性は十分あるだろう。

フローニンゲン博物館におけるシーボルト・コレクションの存在は、これまでシーボルト研究の領域では知られることのなかった重要な新出資料である。フローニンゲン博物館への資料の移動は、ライデン国立民族学博物館の当時の学芸員タイス・フォルカー氏が1956年に重複する資料を他館に分与するという形で行われた。資料が重複する主な理由は、それが組物（セット）であるためであるが、小皿や碗などの小型食器の組物は、通常10点もしくは20点を木箱に収めるのが慣例である。そのため、シーボルトやブロムホフ、フィッセル等が一箱の組物を共同購入し、互いに分け合った可能性は否定できない。また、さらにフォルカー氏の時代にフローニンゲン以外の公立博物館へも同様の移管が行われた可能性も十分想定しうる。組物コレクションの分岐の問題については、とりわけ、オランダの博物館での今後の全容解明が期待される。

## 註

- (1) マティー・フォラー「ライデンのシーボルト・コレクション」『黄昏のトクガワ・ジャパン シーボルト父子の見た日本』ヨーゼフ・クライナー編著、日本放送出版協会、1998年、p. 84。
- (2) 同書、pp. 96-97。
- (3) Rudolf Effert, *Royal Cabinets and Auxiliary Branches Origins of the National Museum of Ethnology 1816-1883*, CNWS Publications, Leiden, 2008, pp. 129, 133.
- (4) 『シーボルト『日本』』第1巻、訳者中井晶夫、雄松堂書店、1977年、p. ii-iv。
- (5) フォラー邦子「シーボルト『NIPPON』出版研究序説——ライデンのシーボルト書店——」『鳴滝紀要』第26号 シーボルト記念館編集、長崎市発行、2016年3月、p. 21。

- (6) 初版本は、ブランデンシュタイン城博物館、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、ロシア科学アカデミー、九州大学附属図書館医学分館、近畿大学中央図書館、慶応義塾大学三田メディアセンター、長崎歴史文化博物館、国立国会図書館、天理大学付属天理図書館などに所蔵される。
- (7) クォリッチ版は、王立地理学協会（イギリス）、オックスフォード大学ボドリアン図書館、福岡県立図書館、東京大学総合図書館、公益社団法人オーアアゲー・ドイツ東洋文化研究協会（OAG）、東洋文庫、国立国会図書館、国際日本文化研究所などに所蔵される。
- (8) 宮崎克典「シーボルト『NIPPON』の書誌学研究 ―『NIPPON』の透かしと配本状況 ―」『九州大学総合研究博物館研究報告』No. 2、九州大学総合研究博物館、2004年、pp. 5-8。宮崎克典『シーボルト『NIPPON』の書誌学的研究』花乱社、2017年、pp. 11, 23。
- (9) 宮崎2017、p. 9。具体例として藤田喜六「NIPPONの書誌学的検討」（『シーボルト「日本」の研究と解説』講談社、1977年）によると1930年～31年にベルリンで『NIPPON』復刻版を製作したトラウツは「『日本』の第7部の琉球島の記事は60部外摺らなかったため、大抵の『日本』には欠けている」とする指摘がある。
- (10) 琉球関係以外についても、筆者がこれまでに調査又は書誌情報を把握しえた『NIPPON』（クォリッチ版：OAG本、国立国会図書館本、国際日本文化研究センター所蔵本、初版本：九州大学本、福岡県立図書館本、国立国会図書館本）は、いずれも収録された図版に若干の相違やページの移動があることを把握している。
- (11) フォラー邦子2016、p. 30。
- (12) 宮崎克典「シーボルト『NIPPON』の原画・下絵・図版」『九州大学総合研究博物館研究報告』No. 9、九州大学総合研究博物館、2011年、p. 21。
- (13) 『新潮世界美術辞典』新潮社、1985年、p. 806。
- (14) 宮崎2004年、p. 5
- (15) H. T. Folkard, *Corporation of Wigan. Free Public Library. Reference Department. Catalogue of Books, Part Ten*. S. Wigan, 1912, p. 3834.
- (16) Alastair Gillies. "Wigan's History Shop", Mmu.ac.uk. ([https://web.archive.org/web/20110718072143/http://www.mcrh.mmu.ac.uk/pubs/pdf/mrhr\\_11\\_museums\\_gillies.pdf](https://web.archive.org/web/20110718072143/http://www.mcrh.mmu.ac.uk/pubs/pdf/mrhr_11_museums_gillies.pdf)) Wigan Public Library は1990年より移転し The History Shop としての継統を経て、2010年に現在は The Museum of Wigan Life となっている。

- (17) 集計 No. とは。神田佐野文庫本『NIPPON』図版に収録された全図版に筆者が付与した通し番号である。
- (18) 宮崎2004、pp. 157, 159
- (19) フォラー1998、p. 96。
- (20) Effert 2008, pp. 132-133.
- (21) フォラー1998、p. 91。
- (22) 以下の文献においてライデンの日本関係民族学資料の収集者の問題の一端が触れている。(Matthi Forrer, The Japanese Collection of Jan Cock Blomhoff, *Japan through the Eyes of Blomhoff: The Blomhoff Collection at the National Museum of Ethnology, Leiden*, Edited by Matsui Yoko & Matthi Forrer, Rinsen Book Co., 2016, p. 71.)
- (23) 責任編集松井洋子、マティー・フォラー『ライデン国立民族学博物館 プロムホフ蒐集目録 — プロムホフの見たかった日本 — 』臨川書店 2016年
- (24) 「アレクサンダー・フォン・シーボルトによるミュンヘン五大陸博物館所在の彼の父親のコレクションに関する目録」(櫻庭美咲・山田仁史翻訳、ブルーノ・J・リヒツフェルト翻刻)『五大陸博物館所蔵シーボルト・コレクション関係史料集成』人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館編集・発行、2016年、pp. 91-165, 289-365。
- (25) ミュンヘンのシーボルト・コレクションとコレクション目録の関係は下記の図録に詳しく説明されている(『よみがえれ! シーボルトの日本博物館』国立歴史民俗博物館編 青幻舎 2016年)。
- (26) 国立歴史民俗博物館が五大陸博物館で行ったシーボルト・コレクション悉皆調査により2017年までに確認された現収蔵総数は3,580件であることを補足する。この集計数は国立歴史民俗博物館 HP 掲載のシーボルト・コレクションデータベース([https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/pfvs/db\\_param](https://www.rekihaku.ac.jp/up-cgi/login.pl?p=param/pfvs/db_param))に基づく(2020年10月20日に参照)。五大陸博物館の台帳に記載されたコレクション中に所在不明の資料や他機関に移管された資料があることも把握されている(同館副館長ブルーノ・J・リヒツフェルト氏の御教示による)。
- (27) マティー・フォラー「ミュンヘンのシーボルト・コレクション — 「新旧」(第一次・第二次収集品)の混在」(『よみがえれ! シーボルトの日本博物館』2016, p. 197)
- (28) Philipp Franz von Siebold, *Brief Philipp Franz von Siebolds an König Ludwig II.* (ブルーノ・J・リヒツフェルト翻刻 人間文化研究機構・国立歴史民俗博物館

2016, pp. 285-287所収)。

- (29) ライデン国立民族学博物館の資料の寸法と資料番号は、ライデン国立民族学博物館 HP 掲載館蔵品データベース (<https://collectie.wereldculturen.nl/?query=search=packages=OnViewRV#/query/1387fac7-0ad8-4739-b9c7-5fa3d65abb70>) を参照。ミュンヘン五大陸博物館所蔵品の陶磁器以外の寸法と資料番号は前掲註26の国立歴史民俗博物館 HP 掲載のシーボルト・コレクションデータベースを参照。フローニンゲン博物館所蔵の陶磁器はクリスチャー・ヨルフ氏、ミュンヘン五大陸博物館所蔵品およびアムステルダム国立博物館所蔵の陶磁器は筆者の調査に基づく。ただし、全資料の種別、生産地、生産年代は筆者に基づく。
- (30) 本稿掲載のライデン国立民族学博物館所蔵品の図キャプションに記載した欧文クレジット記載はすべて、同館の指定に基づきオランダの4つの国立博物館の統括機関 Collection Nationaal Museum van Wereldculturen とした。
- (31) ライデン国立民族学博物館のコレクションについては、2011年5月に日本陶磁の調査のため現地を訪れたが、収蔵庫が移転中のため実見は叶わなかった。その際、同館学芸員(当時)マティー・フォラー氏 Prof. Matthi Forrer より収集品の現在の状況についてご教示いただいた。基本的に全てのシーボルト関連資料は、2011年すでに同館の前掲註29のオンライン・コレクション DB で把握できる状態である事もこの時ご教示を得た。本稿で言及するライデンのシーボルト関連資料に関する情報はこの DB に基づき、資料は実見していない。そのため、本稿掲載のシーボルト関連品のうち、ライデンにしか所在が確認できない磁器の産地記載は平戸焼が多い可能性があるものの、長崎県立美術館の展示図録に掲載された作例を除きすべて肥前磁器とし、詳細な産地判定は留保する。
- (32) ヨルフ氏からの2016年8月29日付文書に基づく。
- (33) 筆者は当時在職していた国立歴史民俗博物館の共同調査で2011年および2016年に本資料を実見した。本稿の記述は当時の調査メモに基づく。(後述のミュンヘン五大陸博物館所蔵品の記録は金工品以外全て同上)
- (34) 『シーボルト「日本」』1977、第2巻、p. 137。
- (35) Philip Franz von Siebold, *Handleiding bei het Bezigtigen der Versameling van Voorwerpen van Wetenschap, Kunst en Nijverheid en Voortbrengselen van het Rijk JAPAN bejeengebracht, gedurende de Jaren 1859 tot 1862, door Jhr. Ph. F. von Siebold, en Tontoengesteld in het lokaal der Vereeniging voor Volkslijt te Amster-*

dam., Gedrukt bij C. A. Spin & Zoon, [1863], p. 59.

- (36) 『ヨーロッパに眠る日本の宝シーボルトコレクション展』 監修長崎県立美術館、発行（株）文芸春秋、（財）シーボルト・カウンスル、1990年、p. 34。
- (37) 『日本古陶銘款集 近畿編』 陶器全集刊行会編、平安堂書店、1973年、p. 43。
- (38) 『シーボルト「日本」』 1977、第3巻、p. 13。
- (39) 『ヨーロッパに眠る日本の宝シーボルトコレクション展』 1990、p. 26。
- (40) 以下文献では平戸焼として紹介されている（Kouwenhoven, Arlette & Matthi Forrer, *Siebold and Japan. His Life and Work*, Hotei Publishing, Leiden, 2005, p. 29.）。
- (41) 筆者は2013年に国立歴史民俗博物館の共同調査で本資料を実見したが、技法の説明は前掲誌26の国立歴史民俗博物館 HP 掲載のシーボルト・コレクションデータベースに掲載された原田一敏氏の解説に基づく。
- (42) 同上
- (43) アムステルダム国立博物館のプロムホフ・コレクションの存在については、同館学芸員のメノー・フィツキー氏（Dr. Menno Fitsky）のご教示により把握し得た。フィツキー氏には2011年5月その特観の機会をいただきお世話になった。
- (44) アムステルダム国立博物館学芸員ヤン・ファン・カンペン氏（Dr. Jan van Campen）のご教示による（2011年6月1日）。氏によれば、KKvZ 番号が2001から3999の資料はプロムホフの収集品であるという。KKvZ2868という作品番号と記述は David van der Kellen Jr. (1827-1895) が作成した王立骨董陳列室のコレクション目録に次のように記載されている。KKvZ2868 Een geelachtige ditto [theepot] met bloemen（花を表した同様のもの [急須]）。
- (45) 松井・フォラー2016、pp. 5, 182, 183。
- (46) 『寄木細工の美 金子コレクション』 町田市立博物館、1998年、pp. 7-8。
- (47) 『シーボルト「日本」』 1977、第2巻、p. 144、他。
- (48) ライデン国立民族学博物館学芸員ダン・コック氏（Dr. Daan Kok）のご教示による（2020年11月16日）。

付記 本稿の成すための調査研究にあたりご協力やご助言を賜りました下記の機関および皆様に記して感謝申し上げます。

久留島浩氏、日高薫氏、島津美子氏（以上国立歴史民俗博物館）、大胡真人氏（公益社団法人オーアゲー・ドイツ東洋文化研究協会）、国立国会図書館



Acknowledgement : I would like to express my deepest gratitude to Prof. Christiaan Jörg of Groninger Museum, Prof. Matthi Forrer and Dr. Daan Kok of Museum VolkenkundeLeiden, Dr. Jan van Campen and Dr. Menno Fitsky of Rijksmuseum Amsterdam, Dr. Uta Werlich and Dr. Bruno J. Richtsfeld of Museum Fünf Kontinente München, for their kind help with my investigation and generosity in providing illustrations.